九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学新聞

https://hdl.handle.net/2324/1520886

出版情報：九州大学新聞. 715, 1978-04-25. 九州大学新聞部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

九州大学新聞

発行所
福岡市箱崎町
九州大学新聞
電話（641）1101
振替福岡13103
4頁80円・2頁40円
年800円・半年400円
発行人　郷乃原　満

4月25日号

紙面紹介
二面　ボードレール散策
三面　映評「でんでらりゅうば」
四面　基準への序章（その2）
　　音鑑へのインタビュー
53年度九大合格者名簿

78オリエンテーション総括

学生状況の問題性を留保す

「自治会」運動試論
――下からの展開をめぐって

「自治会」は学生との関係の円環的考察を不可欠とする。自治会問題を語るとき、学生の自己解体を前提とし目的とする。その中に、自治会が現に在存することからその機能を模索し、形式的に学生の最大公約数を抽出したもの――制度としての自治会――が何故存在するのか、制度が懸命に護ずるところの、主体自身の過程における発生の根拠は一体何か、を考察する。それは、社会への認識の特殊空間的方法である。

時の一経過に過ぎない新歓オリにおいて、制度としての自治会は何らかの装いをして必らず通過する。自己解体の現在の地平において、この問題の円環的考察の意義は余りに重要である。新歓オリは、円環的考察を通しての自己を問う具体的対象でもあるが故に、これを整ち落とさんとする。このレポートはクラスオリに参加した新聞部員の自治会制度への疑問を基軸にしての総括であり風景切開の為の序説である。（編集部）

はじめに

前回（一九七八年一月二十五日号）の論点からまず述べておこうと思う。

それは学生の現状＝いわば、為し崩し的な、歴史の方向性との逆流の中にある社会情勢に迎合し、そこに見出されると否とを問わず庇に流れる支配的価値観、つくりあげられた既成の行動様式、イデオロギーの奔流に身をゆだね、負から負へと邁進し、ひいては他者との人間関係を自ら疎外させる機構そのものへ自己同一性を固定化する方向にある＝を一定限離れた処から運動体としての「自治会」を考察したわけであり、そこに於いて、思い込み組織的な現状況のセクト主義を排し、しかも本質的には「前衛」的な役割を担うべきものとしての積極性を持つ運動体―「自治会」を一つの方向性として見、それを「制度」的面から考察してきたのであった。

そこで今回、ここで当然考察すべきものとして、その主体の問題を挙げねばならない。理想的な法段階としては、「学生」の内包する矛盾自体を止揚し、その解消をはかるために、むしろその主体からの発展・展望を見るのが当然のことであり、それが重要であることも我々は認識している。

だが、前回試みたのは虚点の必要的変化であり、そこまで状況が陥っている、即ち要求していること、を我々は認知せざるを得ないのである。

つまり以後当分「制度」自体からの考察――もちろん、それも一つの組織運動として――は絶対に必要だ。大衆的な模索という点で、その頭初から躓いている。即ち、春休み全体として年中行事化し、定型化した。小さくまとまった感のある教養一年によるオリは、一定の組織運動としては絶対に必要だ。

さて、それでは、以下78オリの具体的な状況を見て行こう。

今回は、教養部一年を中心とした効クラスの各々の独自オリの他、文学部自治会による議演会提起＜井上清講演会＞やオリパンフ作成、法学部自治会による当局の学部説明のオリとパンフ作成等が為された。

「ここでは、教養部の学生を中心としたオリを対象としてオリを対象として考察していこう。

そこから来るオリとそのものへの問いの欠落と、総括的主体の欠如によって、二年生のオリは、昨年をほぼ踏襲する形でしか行われなかったのである。また、過去に於ける錯誤を徹底した批判によって乗り越えなければ、その過去に為された様々な営為とその所産をもゼロに帰してしまうことになる。そこはまず総括の第一点となる。

次に問題点として挙げられるのは新入生個々人に対する関係追究の希薄さである。これは第一の総括と密接な関連があるが、各クラスの内でのオリを行うに当って、充分な討論が為されなかったことに最も大きな問題があると思われる。

それ故にクラス・学内外に於ける諸問題の統一的な座標が極めて不明確なままに、新入生に対しパラパラに提起されるという状況が生れ、「楽しむ」の面が強調される一方で、一・二年間に於ける連続性が遮断されるといった傾向が非常に強く表われたのである。これらの傾向は概して、近年の九大に於ける新歓オリの常時見えてきた問題でもあるのだが、そのことは各クラスのオリパンフにも如実に反映されている。即ち、「大学での単位修得法」的なものはそのまま置くとしても、自己総括的なものとの書かれた内容自体にほとんど多数を占めているのである。単に形式上、クラス編成がある故に、それだけを利して二年の個人総括的なものを「発表」するというのならともかく、たとえそれが偶然にせよ、集団的な、組織的な運動の最も結集し易いクラス運動として位置づけられているのであれば、それが戦術的組織化という意義を持つ。（ここに於ける「自治会」は学文に書いたように「前衛」的な機能を持つものとして規定していることを断っておきたい。）

そして第三に新歓オリを通した一年生の自己総括と、新入生の中にまだ現在的な自己の問題を指摘見、そしてその対象化を行うことである。

ところで、その三つを通して、それが、教育・啓蒙的働きかけが主体となったが故に第三の意義多くの点で接触を持つ得なかったとは、問題であったろうと思われる。今回のオリは総じて、これまでのオリ運動の質を越えず終わったようである。今回のオリ参考に担った者として、私は、過去を含めた、新入生に対する啓蒙という我々への回帰しない回路を断ち、我々自身の仮象を剥ぐこと――現実面の徹底した警察を考えていたのだが、今く不充分なままであったこともここに総括として述べておきたい。

基本的には、クラス運動自体の内実を具事に警察させたこのオリを通して今後、深く問われねばならない問題がほとんどある。具体的な機構としてのこのオリが主観的にも客観的にも「自己のオリ」として把握されて、そこ、下から運動として力を持つ得るのではないかと考えられるのである。

第二に、オリを「自治会」という制度から見れば、その戦術的組織化という意義を持つ。（ここに於ける「自治会」は学文に書いたように「前衛」的な機能を持つものとして規定していることを断っておきたい。）

そして第三に新歓オリを通した一年生の自己総括と、新入生の中にまだ現在的な自己の問題を指摘見、そしてその対象化を行うことである。

ところで、その三つを通して、それが、教育・啓蒙的働きかけが主体となったが故に第三の意義多くの点で接触を持つ得なかったとは、問題であったろうと思われる。今回のオリは総じて、これまでのオリ運動の質を越えず終わったようである。今回のオリ参考に担った者として、私は、過去を含めた、新入生に対する啓蒙という我々への回帰しない回路を断ち、我々自身の仮象を剥ぐこと――現実面の徹底した警察を考えていたのだが、今く不充分なままであったこともここに総括として述べておきたい。

基本的には、クラス運動自体の内実を具事に警察させたこのオリを通して今後、深く問われねばならない問題がほとんどある。具体的な機構としてのこのオリが主観的にも客観的にも「自己のオリ」として把握されて、そこ、下から運動として力を持つ得るのではないかと考えられるのである。

＜78オリ総括から＞

去る四月六日の入学式の後を受け七日・十日に渡って新入生歓迎オリエンテーションが開催された。まずこの78オリの状況を分析することから、オリとは何かをも考察し付け、そしてそれを「自治会」との関係でもまた把え返してみることが必要であると考えられる。というのは、先にも述べたように自治会という制度は、現状況下の学生の意識構造に楔を打ち込み、一定の方向性・歴史的に位置づけられる我々の課題を制度的任務として、「上から」要請するものとして考えたのではあるが、それを担うべき主体は当然、本来的な逆規定、「下から」の運動構築と不可分の関係にあるのであり、そこに「自治会」的位相からのオリの位置づけが為されるべきであると考えられるからである。

さて、それでは、以下78オリの具体的な状況を見て行こう。

今回は、教養部一年を中心とした効クラスの各々の独自オリの他、文学部自治会による議演会提起＜井上清講演会＞やオリパンフ作成、法学部自治会による当局の学部説明のオリとパンフ作成等が為された。

「ここでは、教養部の学生を中心としたオリを対象としてオリを対象として考察していこう。

全体として年中行事化し、定型化した。小さくまとまった感のある教養一年によるオリは、一定の組織運動としては絶対に必要だ。大衆的な模索という点で、その頭初から躓いている。即ち、春休み明け、大学側の打ち出した学生会館使用規則を資料として掲載するが、特別使用として当局が、規定しているものの使用目的のすべてが会議集会に関するものであり また使用者察自体極めて閉鎖的なものとなっている。これを通した深い討議がぜひとも必要である。

＜資料＞

九州大学学生会館細則（抄）

（趣旨）

第一条　九州大学学生会館規則（昭和三十九年六月九日施行）第十六条の規定に基づき、この細則を定めるものとする。

（使用者の範囲）

第二条　九州大学学生会館（以下「会館」という。）を使用できる者は、次のとおりとする。

一　本学の学生及び教職員

二　館長が特に認めた者

（開館時間）

第三条　開館時間は、午前九時（食堂については営業開始時）から午後九時までとする。

（使用種別・使用時間等）

第四条　会館の使用種別は、次の二種とする。

一　自由使用　使用願の提出を必要としないもの

二　特別使用　使用願を提出し館長の許可を受けて使用するもの

2　会館の各部行の使用種別・使用時間等は、次の表のとおりとする。

（ここでは、特別使用のみを掲載する）

大集会室	午前九時～正午	和室（小）　午後四時三十分～午後九時
音楽鑑賞室	正午～午後四時	第一談話室　午後四時三十分～午後九時
和室（大）	正午～午後四時	第二談話室　午後四時三十分～午後九時
第一食堂	営業終了時～午後九時	第一会議室　午前九時～正午
第二食堂	営業終了時～午後九時	第二会議室　正午～午後四時
		第三会議室　午後四時三十分～午後九時
		第一食堂　営業終了時～午後九時
		第二食堂　営業終了時～午後九時

（休館日）

第五条　休館日は、次のとおりとする。ただし、食堂については、館長が別に定める。

一　日曜日

二　国民の祝日に関する法律（昭和二十三年法律第百七十八号）に規定する休日

三　三月二十一から三月三十一日まで

四　八月十一日から八月二日まで

五　十二月二十八日から翌年一月四日まで

（使用手続）

第六条　会館の各部屋の特別使用を希望する場合は、使用責任者は館長の許可を受けなければならない。

2　使用責任者は、前項の使用願を使用予定日の四週間前の同曜日から前日（学外者を含むときは一週間前の同曜日）までに提出するものとする。

3　使用責任者は、本学の学生又は教職員に限る。

昨年十二月六日、揮発ノ機動隊を導入し、学生会館（以下学館）を具体的に使用する「学生」との一切の話し合いを拒否したまま、強権的に学館ロックアウトを断行した大学当局は、四月六日、入学式当日、学館を開館するに当って一方的に使用規則を打ち出してきた。

自主的学生活動という面を考察すれば、自ら明らかなように、管理面の強調された規制の下では、物理的のみならず精神的諸動に与える影響は多大であり、それ故に、六四年の学館設立当時から学館の管理運営をめぐる問題が存在しつづけて来たのである。ロックアウト当日から予想された学館運営委員会（学生側十人、当局側、奥田講長を含め十一人、機関）はただがしかし全く持たれることなく規則は打ち出され、それに伴って既に学館内の、現実に様々な活動を――種々の討論集会等――為していく中で展開を見せようとする運動が存在していることを見落せないだろう。

尚、大学側の打ち出した学生会館使用規則を資料として掲載するが、特別使用として当局が、規定しているものの使用目的のすべてが会議集会に関するものであり また使用者察自体極めて閉鎖的なものとなっている。これを通した深い討議がぜひとも必要である。

（「会館」という。）を使用できる者は、次のとおりとする。

一　本学の学生及び教職員

二　館長が特に認めた者

（開館時間）

第三条　開館時間は、午前九時（食堂については営業開始時）から午後九時までとする。

（使用種別・使用時間等）

第四条　会館の使用種別は、次の二種とする。

一　自由使用　使用願の提出を必要としないもの

二　特別使用　使用願を提出し館長の許可を受けて使用するもの

2　会館の各部行の使用種別・使用時間等は、次の表のとおりとする。

（ここでは、特別使用のみを掲載する）

大集会室	午前九時～正午	和室（小）　午後四時三十分～午後九時
音楽鑑賞室	正午～午後四時	第一談話室　午後四時三十分～午後九時
和室（大）	正午～午後四時	第二談話室　午後四時三十分～午後九時
第一食堂	営業終了時～午後九時	第一会議室　午前九時～正午
第二食堂	営業終了時～午後九時	第二会議室　正午～午後四時
		第三会議室　午後四時三十分～午後九時
		第一食堂　営業終了時～午後九時
		第二食堂　営業終了時～午後九時

（休館日）

第五条　休館日は、次のとおりとする。ただし、食堂については、館長が別に定める。

一　日曜日

二　国民の祝日に関する法律（昭和二十三年法律第百七十八号）に規定する休日

三　三月二十一から三月三十一日まで

四　八月十一日から八月二日まで

五　十二月二十八日から翌年一月四日まで

（使用手続）

第六条　会館の各部屋の特別使用を希望する場合は、使用責任者は館長の許可を受けなければならない。

2　使用責任者は、前項の使用願を使用予定日の四週間前の同曜日から前日（学外者を含むときは一週間前の同曜日）までに提出するものとする。

3　使用責任者は、本学の学生又は教職員に限る。

学館前に出された学館使用規則

大学当局一方的に
学生会館規則を打ち出す

前に教養部自治会以下C自が開いた教養部新歓オリ実行委員会結成大会は、C自執行委員会結成の会議、C部新歓オリ実結成を見ないままに、学友会中央執行委員会が全学オリ実結成を呼びかけるといった具合で、（当日経過有志、管理規制反対C部実行委員会からその責任が追求された）その場も実質的な討論が為されないままに終わり、その後大衆的な場が持たれずに分離的個別の分散したオリへと時間切れで突入していく以外なかったのである。そうした準備のたち遅れと、そこから来るオリとそのものへの問いの欠落と、総括的主体の欠如によって、二年生のオリは、昨年をほぼ踏襲する形でしか行われなかったのである。また、過去に於ける錯誤を徹底した批判によって乗り越えなければ、その過去に為された様々な営為とその所産をもゼロに帰してしまうことになる。そこはまず総括の第一点となる。

次に問題点として挙げられるのは新入生個々人に対する関係追究の希薄さである。これは第一の総括と密接な関連があるが、各クラスの内でのオリを行うに当って、充分な討論が為されなかったことに最も大きな問題があると思われる。

それ故にクラス・学内外に於ける諸問題の統一的な座標が極めて不明確なままに、新入生に対しバラバラに提起されるという状況が生れ、「楽しむ」の面が強調される一方で、一・二年間に於ける連続性が遮断されるといった傾向が非常に強く表われたのである。これらの傾向は概して、近年の九大に於ける新歓オリの常時見えてきた問題でもあるのだが、そのことは各クラスのオリパンフにも如実に反映されている。即ち、「大学での単位修得法」的なものはそのまま置くとしても、自己総括的なものとの書かれた内容自体にほとんど多数を占めているのである。単に形式上、クラス編成がある故に、それだけを利して二年の個人総括的なものを「発表」するというのならともかく、たとえそれが偶然にせよ、集団的な、組織的な運動の最も結集し易いクラス運動として位置づけられているのであれば、それが戦術的組織化という意義を持つ。（ここに於ける「自治会」は学文に書いたように「前衛」的な機能を持つものとして規定していることを断っておきたい。）

そして第三に新歓オリを通した一年生の自己総括と、新入生の中にまだ現在的な自己の問題を指摘見、そしてその対象化を行うことである。

ところで、その三つを通して、それが、教育・啓蒙的働きかけが主体となったが故に第三の意義多くの点で接触を持つ得なかったとは、問題であったろうと思われる。今回のオリは総じて、これまでのオリ運動の質を越えず終わったようである。今回のオリ参考に担った者として、私は、過去を含めた、新入生に対する啓蒙という我々への回帰しない回路を断ち、我々自身の仮象を剥ぐこと――現実面の徹底した警察を考えていたのだが、今く不充分なままであったこともここに総括として述べておきたい。

基本的には、クラス運動自体の内実を具事に警察させたこのオリを通して今後、深く問われねばならない問題がほとんどある。具体的な機構としてのこのオリが主観的にも客観的にも「自己のオリ」として把握されて、そこ、下から運動として力を持つ得るのではないかと考えられるのである。

そして第三にオリとC自との問題を述べねばならない。

先にも書いたように自（民青系）はオリに対する主体的取り組みをほとんど持たず、ただ教種のオリ用物品の各クラス配分を行った過ぎなかったのである。現在のC自にとってオリとは一体何処に位置づけられているのだろうか。行事としてではなく、制度としての「自治会」にとっては、オリは最重要課題として存在するべきものであるというのは決して言い過ぎにはならないことは、前回とも合わせて充分明らかになったと思うが、現在の「自治会」運動のレベルでは、それは無縁なものとしてしか存在し得ないことも今回のオリによって一層明瞭になったと思われる。絶えざる討論による「下から」の自治会の主体形成を放棄した、しかも「自治会」という「制度」への本質的問いかけがない、無意味な執着による自己保身、思想性の虚弱とその基盤の完全な喪失とによって、その運動自体学生の、自己表現を無化させるという情況を創出したのである。

日常性との対決を無視した以上、「回路」の本質的断絶は不可避のものとなっていることは、明白だろう。

さて、以上三点を挙げたが、これに際して「オリ」とは何か、という根本的な問いにたち帰らねばならない。

それには、まず、当面する諸課題――我々を包む文化・政治的情勢――と対峙する為に、必要的方向性としての基盤の確立が要請される。その基盤とは＜政治＞に深く組み込まれた＜生活＞の中に於ける現実の具象化された人間どうしの関係を固い直していくこと、そこでの媒体物に対する多面的な追求が必要であることを確認すべき前提として進めていく。

その第一は、目的を持って入学するのではない新入生に対する提起である。これを今の偶然性に委ねる必要はない。彼方のできごとの本質を抽象化して自らの生活の中で根底的共通性を有した今く別個の現象の中に再構成できる。この主体性において彼方の人と自らが連帯できる。政治運動においてはこの過程抜きでも効果を期待し得るが、しかし、それは永続的なものではない。連帯とは「乗っかかり」であってはならない。対象に学ぶとき、主体的とは自らの空間に基盤を有する独自の位相の創出である。彼方のできごとの情報が入り過ぎるが故に、静かな日常であるが故に。▼ことばで表わすと、それは自己を表わし、故に他者と関係する。難解な文章を自前にして三度読んで理解できないとき、文章を書いた者自身がわかっていないのか、、読む者が理解力に欠けるかのいずれかである。この難文を書く私に耳の痛い話である。難解が苦かは内容を読みこなそうとせねばならないことを前提とする。前提を欠いて難解とは言い難い。内容について批判するのでもなく、その対象としているものを自らも熟考するのでなく、体裁の良い知識人的ポーズをつくるか、理解できないことを吸収するのでなく不必要なものと開き直る。難解とは文章に対しての自身の良加減さに対してか。自己に他者に、対象全てに疑いを抱かんとする姿勢なくしての知識なく、まさしく「看板だけの知識」倒れ。それを拠り所にして、「オイラは知識人、新入生は形式的、実質的いずれにせよ、カタイものを持ったスマートな教養オリ」の陽炎にボケた者には経済い代物。

ちょいと、こっ東のはざま　音村・から

世間・酔み出せば、ともかしこも春、春。生活と関係ない、寂しい浮かれ騒気、まさに春。隣の＋ラ猫の呻きも春の間えに変わり、春に遅れはせながらと浮き浮きコタツを片づける、オイラ村の関人。世間の春の雰囲気に取り縋り必死に真似る、あのイジラシサが売り物の純朴な先ッて、かの都会人のカッコランを本人たいぶモノにしたつもりになりまして、今年の春、ちと様ち違う。今はやりの活字で言いますと、多様化、価値観の多元化を平然と使いまして、全身に浴びる陽光の中の暗闇なる話題としまして全ナンセンスとなりましたそうで。ものごとにこだわり縛られない時代遅れの関人はこの雰囲気に困惑の余り妄想に駆られ一文の得にもならないことを「生驚命考え始めまして、流行に転い人にカタイ云々のレッテルを張られ蹴んじられる彼、ひとこと、「俺だって言い分があるあ」ナンチャッタ。かの流行派、俗に言う物質文明の恩恵あづかり、そのありがたさに感謝もしないまま、村の閉鎖性を打破し、明るく民主化しようと意欲的に文化水準の格差を両方向に徹開しようと村の中を漕歩しております。でも、自分で思いこんでいる同一化の関係が全く逆の関係を生み、民主化・閉鎖化になる。と力ダク考えてみては▼彼方のできごとはいとも易く知り得、そして忘れてしまう。生活の中で確実に若くは或る程度でも結びつき得る日常的な物質性を有していなければ、それはいつもの「彼方のできごと」。彼方のできごとが自らのとなり得るにはまさの根底において共通性を有することが必要である。これを今の偶然性に委ねる必要はない。彼方のできごとの本質を抽象化して自らの生活の中で根底的共通性を有した今く別個の現象の中に再構成できる。この主体性において彼方の人と自らが連帯できる。政治運動においてはこの過程抜きでも効果を期待し得るが、しかし、それは永続的なものではない。連帯とは「乗っかかり」であってはならない。対象に学ぶとき、主体的とは自らの空間に基盤を有する独自の位相の創出である。彼方のできごとの情報が入り過ぎるが故に、静かな日常であるが故に。▼ことばで表わすと、それは自己を表わし、故に他者と関係する。難解な文章を自前にして三度読んで理解できないとき、文章を書いた者自身がわかっていないのか、、読む者が理解力に欠けるかのいずれかである。この難文を書く私に耳の痛い話である。難解が苦かは内容を読みこなそうとせねばならないことを前提とする。前提を欠いて難解とは言い難い。内容について批判するのでもなく、その対象としているものを自らも熟考するのでなく、体裁の良い知識人的ポーズをつくるか、理解できないことを吸収するのでなく不必要なものと開き直る。難解とは文章に対しての自身の良加減さに対してか。自己に他者に、対象全てに疑いを抱かんとする姿勢なくしての知識なく、まさしく「看板だけの知識」倒れ。それを拠り所にして、「オイラは知識人、新入生は形式的、実質的いずれにせよ、カタイものを持ったスマートな教養オリ」の陽炎にボケた者には経済い代物。

広告のため非表示

ボードレール散策

退廃と、倦怠と、美学と、

《群集は孤独者の家郷である》

一日じゅう、誰と会うこともなく、ひとりで部屋に籠もっているとき、カーテンの隙間から差し込んでいた西日も落ちて、黄昏時にでもなれば、不意に戸外に出てみたくなる。天神の雑踏、中州のイリュミネイションの下を大声あげて歩く酔漢、それに客を呼ぶ酒場の女や街娼たち。（それらはパリの街にも見られる風景であったろう。）そういった人間の群が、渇いた心には、いやおうなく飛び込んで来る。すっぽりと群集の中に入り込むと個々の憂いが、いつの間にか、その多様性に浄化されてくる。天神の雑踏、中州のイリュミネイションの下を大声あげて歩く酔漢、それに客を呼ぶ酒場の女や街娼たち。（それらはパリの街にも見られる風景であったろう。）そういった人間の群が、渇いた心には、いやおうなく飛び込んで来る。すっぽりと群集の中に入り込むと個々の憂いが、いつの間にか、その多様性に浄化されているのに気づく。まさに汚れた浜辺を洗う海さながらである。

《群集。その無名性、その偶然性、その途方もないエネルギーとその途方もない無力。数百数十数万の個々のドリマが触れあわぬまま閉々とゆきちがう。血と汗の飛沫を内蔵した無言の野外劇。瞬間ごとに形を変える、不定形の、数千数万の不可視の触手ある怪物。この怪物との結婚！ともっと深く、もっと面白くをそむけさせるなまの儀式？。しかも相互の撞底的無名性によって保証される、絶対の、しかし一触即発の危険な自由！がそこにはある。その自由は孤独であることによって、裏打ちされている。自己を現実に他との交流のない孤独と認めることで、一個の自由な存在であることを自覚するようになる。やがて同様な対象を認知する八四八年の二月革命には、彼も武器を手に参加した。しかしその流血のの、ルイ・ナポレオンの統治の時代においても、ヴィクトル・ユーゴーほどに、反旗を翻すこともなかった。若いパリを出て政治の渦巻いて交感をするようになる。群集と孤独の交感は普遍的な融合にまで飛躍され、不可解な魅力さえ醸し出す。

多数者に溶解すること能にでも許されるべきではない。群集を楽しむことは一個の芸術である。ゆりかごの中で仮装のまた仮面の嗜好を、定住憎悪を、旅への情熱を妖精に吹き込まれた者だけが人類の犠牲において活力の大酒宴をくりひろげることができる。

多数者、孤独。これはたがいに匹敵する言葉、活動的な詩人にとっては交換可能の言葉なのだ。おのれの孤独を雑踏と化するすべを知らぬ者は、また、せわしく往来する群集の中にあって独りたるすべを知らない。

この特権、意のままにおのれ自身となることができ、また他人のなることができるという比類のない特権を詩人は享受する。肉体を求めて徘徊する魂のように、詩人は好き放題になりたいものを間わぬ他人の人格に忍びこむ。ただ詩人にとってのみすべては空席だ。そしてもしある種の席がふさがっているように見えたとすれば、それは詩人の眼からみてその席が訪れるにも値するだからである。

孤独な、思いに沈む散策者は、万物を包みこむこの合体から、ある種の異様な陶酔を味わうのである。やすやすと群集と婚姻をむすぶ者は、箱のように閉ざされたエゴイストや、軟体動物のように監禁された怠け者には永久に縁のない熱病的快楽を知っている。その場の状況が提供するありゆる職業、すべての歓び、一切の悲惨を彼は、わがものとして取りこむのである。

（「巴里の憂鬱」）

ボードレールもまた、すすんで群集に溶った詩人であった。そしてパリは「極」の家郷であった。一八四八年の二月革命には、彼も武器を手に参加した。しかしその流血の南洋航海に出ている。また、晩年にベルギー旅行を試みたが失意のうちに再びパリに帰っている。このベルギー旅行と南洋航海を除くと、ボードレールはほとんどパリで過ごしている。必ずしも都会はパリでなくてもよかったのだ。

ボードレールは、パリに彼のブルジョワ的南洋航海を認めようとしない地上の苦る所が、熾烈な修羅場であったため、生そのものの仮住まいの宿とすべき地であればよかった。ただ仏語で考え、仏語で詩を書いたボードレールが、ゆえの知れぬ愁いを感じていたのは、様々な様性に溢んだパリが最良の場であったのだろう。

さらに、パリには彼のブルジョワ的「悪の華」の八四年版の序詩にみることができる。

（「七人の老婆」）

古い都会の人り組んで紆った街路の襞の奥／一切が、恐怖でさへも、魅力と変るような場所で／どこともならぬ特別の気分のままに、俺は／奇妙な、老婆れた、可愛らしい人物たちを、待伏せる。／「小さい老婆たち」

「悪の華」でもっとも好んで用いている語句は多分猫であろう。事実、彼は猫の美学であった。事実、すでに二月革命の年には、豹変したように、保守派の新聞「国民論壇」の編集長をつとめている。また、名声への欲もともなってか、アカデミー・フランセーズに立候補までしている。借金に追い立てられていた彼は、悪しく言えば、政治、倫理はどうでもよかった。ただ彼が陶酔とたのは、動乱の戦慄と崩壊の美学であった。

「悪の華」における猫の象徴は、当時もまだ「悪の華」の真価が認められていたと錯覚する点にあるばかりでなく、当時のボードレールが能に結晶の必要があったであろう。告訴に最もよく売れた本は、ポーの『意外の物語』の仏語訳本すぎなかった。そして、「悪の華」においてすら、隠れ名になったのは、禁断詩篇の数篇によっているのは幾ら余地がない。

△守護の天使、詩の女神、聖母マリア△と崇めていたサディチ夫人に、それまで無署名の詩をおくり続け、「悪の華」の出版の後、しかもその公判の直前に初めて署名入りの詩を送っていることでもわかるように、奇を衒い、虚飾をふりまいたボードレールの行動や語句が、思惑どうりに功を奏したという自信が、誘みとれる。そして公判に敗しても、火に油を注ぐようなことを添えている。この手法は当時知識人の間で秘かに流行していたといわれるサドの「悪徳の栄え」の影響力に暗示されたと見做すのもあながちまちがってはいまい。

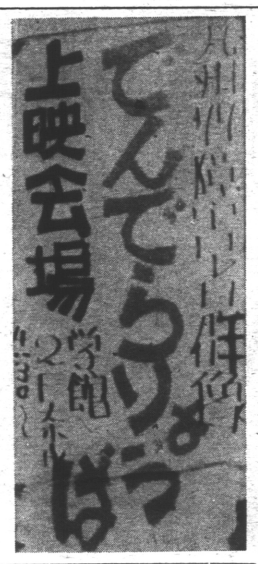
私の考えるところでは、彼には拭い去り難い退廃が、いつの間にか巣くっていたのではあるまいか？ただ唯一の上昇志向は、詩人という逸楽の中に浸っていいからだ。

二月革命に参加したボードレールは、武器をもって立ち上がったものの、社会革命を真にのぞむ人ではなかった。社会的な法規や道徳を打ち／奇怪な暗い神殿、唯一の希望がは残るばかり／それは即ち、死が、新しい天国として空に輝って／彼らの脳髄の花々を、麻酔と咲かせるであろう希望だ。／

（「風景」より）

ボードレールは、日本のまさに夜明け前一八六七年に脳梅で死んでいる。享年四十六歳であった。一度、二十四歳で自殺を試みている。そんな彼の作品には一貫して死臭が漂っている。そういえば正統派ボードレリアンのひとり、ロートレアモンの自殺も二十四歳であった。他に、ランボー、中原中也、大手拓次、梶井基次郎、原口統三と彗星のごとく現われ消えていった象徴派詩人たち。彼らと同様にボードレールにも生命まで否定しかねない否定感が終始つきまとっていた。否定は死への憧憬あるいは成熟の拒否という形であらわれた。死は、ボードレールを許容しえない世界からの解脱を意味した。また成熟の拒否とは詩人となって、自己の存在証明をあえて試みんとする妄執に今もってとらわれていながらも、成熟の虚無と悲哀を唯一残された選択の自由によって拒むことであった。そのように残り惜しげに生きる詩人の永遠のやすらぎは、やはり死以外ではなかった。病いによる発熱、世間との軋轢を、たちまちに解き放ってくれるのは、死の臥床であった。そんな彼の悲痛な呻きは八慰めて、ああ、生きさせさへくれるのは、死だ。／という詩句に集約されよう。

何ら限界のない生命が、肉塊の重圧や生活の煩わしさを担って得意以外の何であろうか。顧みれば、生命の残滓を一時に燃して、刹那の閃光でもあげてみよう。その後、天馬に跨って空を翔るもよい、永遠の歴史を懐に抱く海賊に帆船を出すもよい。『悪の華』は天馬に始まり、帆船に終った。



九州77障害者群像
でんでらりょうば

4月25日4時30分
学生会館大ホール

去る四月二十五日、四時五十分より、学生会館大ホールに於いて「九州77障害者群像『でんでらりょうば』上映討論会」が開かれた。その内容に入る前に明らかにしておきたいのは、この企画に当たった九大上映実行委員会が、学生会館を使用するに際して、当局は一方的に打ち出した学館使用細則（当局案）によって、様々な圧力を加えてきたことを確認しておきたい。

さて、まず上映実行委の方から「この映画は身体障害者が自ら制作したということを抑さえておく必要があり、更に映画は映画でしかなく、それを尊るものは現実に身体障害者と接していくことからも生れ得ない」という提起があり、その後上映に移っていった。

それは最初、公園で遊ぶ子供たちの中に身障者が入っていき、彼らが、子供たちに「遊びなってもいい」と言う中、子供たちが走りながら逃げ去っていくところから始まる。途中、言葉が断片的にしか理解できず、その内容自体を説明するこは、それ程意義のあることではない、と思われるので、それは覚くが、自分たちの権利を主張する行政交渉で彼らが見せた、怒りや、この映画の制作に当たった人々が、属する「青い芝の会」のメンバー

基準への序章

文化的状況へのアプローチ

――音鑑部員へのインタビュー――

ここに、前回の美術部に引続き音鑑（音楽鑑賞部）へのインタビューを掲載する。それは、私たちの活動の模索への前提として現在の学問思想状況というものをまず客観的に明らかにし、認識しておく必要があるからである。そして私たちは、これに表れた状況に対し、近く批判的に応えねばならないことをここに確認しておきたい。

――ではまず、学館問題に対する直接的な関り方から聞いていきます。

A　それは個人的な契機を含めて？

――そうです。

B　僕は、まず最初四月頃、部室で騒ぐ会人が来て、狭い中の事等いろいろパンフレットとか持ってきて、いろいろ話しまして、それが一番最初のものでした。その後六・二（大学当局の学館反修に関する評議決定）があったでしょよ。あれまでほとんど知らなかった。学館問題に対して。それからざ、以後、昼休く歩いてたら音鑑の先輩たちが出場前に座り込んでいろいろ話し込んだりして音鑑のダンパで使ったりするし、あの時はリズムに入っていて、あんまりあいつに対して偏見というは持ってなかった。

――自分の問題点としてはどういうのがあったんですか。

B　自分の問題点としては……最初からわかっていたんじゃない。学生運動を抑圧するためにやっているんだと

――学館闘争へ、たとえば音鑑にしてもサークルとして参加したわけでしょ。

A　そこは違うね、それがあいまいだ、サークルとして、していくということはない。やはり個人個人としてのそういう面が多かった、そして旗だったりして……。

――だけどそういう所問題があるでしょ。各個人の考え方はちがっていても、政治的な表現に向う時に、ある程度の意志一致があるから……。

A　政治的な表現じゃなかった訳、結局。政治的政治的という言葉を使うけれど、あらゆることが政治的であって、例えば学館ロックアウトということを教育の再編とかなんとかいうことを考えずに、ただ自分達にとってあれが許せないということがあれば、それは十分政治的だと僕は考えるしね、そんな意味で教育の再編がどうのこうのと言う必要はないと思う。

B　僕達はやりと理論的じゃなくて、感性的に動いたというが点多いんじゃないかな。

――まあ音鑑なら学館をダンパの直接契機、そこが規制されると場の問題として、騒音問題が直接的に学館問題が取り出されて、そこらへんがずっと当局がついてきとして、自分達が金を集めて、企然音鑑としてもあったんでしょう

A　騒音問題ということに関したら、騒音問題に関して学校が言ってたのは、ダンパと特別言ってなかったんだよね、直接的には、ダンパのことで直接問題を言ってたのは、音楽とか芸術とか、ああいうのはね、今の社会の中でだったら金で計られ、金銭的に価値感が決められるとか、そういうことに矛盾を感じる……。

B　僕は学館の問題にかかわっていく中で一番はっきりしてきたというのは、中学時代から学校の教育といったら有、試験の前になったらいっしょうけんめい勉強して点だけ取ってそして、ちょっといい高校に入って、今度は高校に行って一生懸命勉強して、なんとか大学に入ってから、これが学問かと薄そうに言うけど、やっぱりなんかおかしいんじゃないか。勉強したくないというのはあったけどね、ちょっと腹立ってこともあったし、アホらしくしてね。そして大学に入ったら資本主義云々という話しがいろいろあったりして、なるほどというと感じがして、そこ辺に引かれたりして。

――学館問題もまだ終っていない。実際開館されて訳だけれども、これから考えられるべきものも、会然解決もされていないし、今の時点でどんなふうに思っているか聞かせてほしいんですけど……。

C　どんな風にて、学館が開館されたこと今の学館について、

――そう今の学館について、

C　僕らから言わせたら、でっちあげられたと。規則付きで学館は開館されたんだけれども、今できるのは細則の中で自いっぱい出てこうというか、それからまたもう一度ただん力関係を補していって、今最終的には、まだ前みたいに自主管理というのがあれば一番いいんだけど今の力関係だったら会然無理だから今だったら自いっぱい使っていくしかないだろうと思う。今、不当という反撃の基盤の力にもならないと自分たちが敗北するということ、というのをとらえていたらそれは二十四時間とまれるから便利だとか、そういうような事点で学館自分たちが敗北するということ、どうしようもないという感じ。だいいちっていうことで、今から感じていてもどうしようもないということ。と近藤幸、色紙義朗、清水徹、清水麻生、安藤啓三、池村利文、石松義雄、広文、白木真二、鶴宏、杉春生、杉壁康雄、澄川温俊、早田真幸、沉光徳、後藤正博、最所圭三、酒井一夫、坂本明夫、坂本真二、実倉隆彦、横田光広、横山年治、米倉義一、厚雄、藤野豊美、藤本路興、古沢博司、星加修、堀江嘉彦、堀川順一、堀越秀人、松田邦彦、松浦直也、松田俊也、松尾康二、松永利治、松本秀峰、真辺和文、村上真、持永勇一、森信吾、安枝信次、安永繁文、山田康真、山田俊、山口晋一、山口万士、山口康真、山口晋一、山口万士、山口康真、山口晋一、山口万士、山口康真

一九七八年九大合格者氏名

（○＝女子）

文学部

教育学部

理学部

物理学科

地質学科

数学科

生物学科

化学科

経済学部

経済学科

経済工学科

法学部

医学部

歯学部

工学部

土木工学科

水工土木学科

建築学科

電気学科

薬学部

広告のため非表示